【保存版】
No. 75
2023年（令和5年）
2月15日発行

熊　地　区
防災のお知らせ

熊地区自主防災会
事務局

『あの日を忘れない』

2011年3月11日午後2時46分に発生した東日本大震災から12年目を迎えます。

自らも被災体験した作家の伊集院　静さんが、東日本大震災から1年たった時の、思いをつづられた詩を紹介します。

わかって欲しい

東北の町の、村の、里のどこかで
昨日、ようやく帰ってきた人の通夜があり
今日はその人の葬儀に並ぶ人がある。
明日も誰かの月命日がある。
そう、北の地では毎朝、毎夕、どこかで祈りを
捧げている人がいる。
そうして三千余人のまだ帰らぬ人たちを待つ人が
同じように祈っている。
その上、町を去らねばならぬ人がいて、見送る人がいる。
どちらも泣きながら互いのしあわせを祈っている。
復興だ。1年が経つと、テレビ、新聞、雑誌は言うけれど、
この祈り続けている人たちのことをもう少しわかって欲しい。
同情がほしいでは決してない。
この震災がまだ続いていることをあなたたちにもわかって
おいて欲しいのだ。
作家の私が、この人たちに言えることは、悲しみは
いつか終わる時が来る。
そうして笑える日が必ず来る。という言葉だけだ。
どうか、わかって欲しい。

伊集院　静　（いじゅういん・しずか）
1950年山口県生まれ。作家。仙台市在住。92年「受け月」で直木賞。